〔教育実践の記録〕

世界の“今”と繋がる国際理解教育

―ガザとの対話から生まれる共有点―

末　佐和子（東京都立小石川中等教育学校）

はじめに

個人個人が自由に意見を発信できる時代になり、対立の強化と相互理解が紙一重になった。そのような世界で、日本の国際理解教育が果たすべき役割とは何だろうか。世界の課題と考えると、スケールが大きすぎて圧倒されてしまうだろう。しかしながら、小石川中等教育学校の生徒（以下、小石川生）と共に世界の課題を考える中で、一人ひとりの“世界の分断を克復するための心の持ちよう”は、この分断された世界でも探求できることだと確信することができた。すなわち、世界や他者を知ったあとの理解と寛容性、そして想像力だ。その理解、寛容性、想像力があれば、一人ひとりが異なる文化を持つ他者にも、思いやりを働かせることができるのではないか。

本実践記録では、2021 年度に 6 年生（高校 3 年生）の授業で実施した国際理解教育の授業を振り返りたい。

授業の概要

2021 年 5 月にイスラエルとガザを実効支配しているイスラム組織ハマスとの衝突があった。そこで、JICA パレスチナ事務所にオンラインによる交流授業を依頼した。JICA パレスチナ事務所の日本人スタッフより、令和 3 年 5 月に起きたイスラエルとハマスの衝突によるガザへの爆撃の解説と、ガザ出張所のパレスチナ人職員とその子女に英語での交流をお願いした。詳細は以下の通りである。なお、本授業は異国の地の高校生と交流を図ることが目的であるため、政治的中立性は確保されていると判断される。

【授業概要】

1. 日時：令和 3 年 6 月 2 日（水）5 時間目 12：55〜13：40（現地時間 6：55〜7：40）
2. 場所：小石川中等教育学校⇆パレスチナ自治区ガザ（オンラインビデオ会議ツールによる中継）
3. 対象クラス：小石川フィロソフィーⅥ（英語）
4. 目的：クラスには、国連職員を目指す生徒、ジャーナリストを目指す生徒、国際協力関係の仕事に就きたいと考えている生徒、海外で働きたいと考えている生徒などがいる。マクロの視点（鳥の視点）から世界のニュースを学び、ミクロの視点（アリの視点）からある民族や一個人の人生・対話にフォーカスすることで、温度感のある国際理解を図る。それぞれの民族や個人が語るに値するストーリーを持っていることを知ることで、新しい視点を獲得し、将来、生徒が大人になった時に異なる文化を持つ人と“対話“を

生むことを目指す。自分の夢を描くことに留まらず、日本や世界に貢献するために、志を立てることができる人を小石川から輩出することを目指す。

5. 目標：（1）現在日本でもニュースになっているが、日本の世界に関する報道はとても浅いという向きもある。今回のセッションでイスラエルとガザを実効支配しているイスラム組織ハマスの衝突を理解する。

（2）現地に暮らす一般市民との温度感のある交流を通して、学ぶこと、知ることへの謙虚さと探求心を醸成する。

（3）現地に暮らす一般市民との温度感のある交流を通して、自分達の課題研究に誇りを持ち、将来それを他者のために活かそうとする素地を養う。

（4）コロナ禍だからこそオンラインが有効手段であることを体験し、将来新しい生活様式で新しいやり方を生み出す素地を養う。海外に行くことができない時こそ、オンラインで想像力の醸成を図る。

6. 講師：JICA パレスチナ事務所次長（当時）坂元　律子　氏

7. 交流相手：JICA パレスチナ事務所ガザ出張所 JICA 職員サヘル・ユニス氏と双子の息子と娘のジャベルさん、エリアンさん

授業内容

本国際交流は、学校設定科目である小石川フィロソフィーという課題研究の授業で、国際理解や英語ディベートを選択した 24 名のクラスで実施した。授業の構成は下記のように 3 部構成にした。

【授業の流れ】

第一部：現地の状況

JICA パレスチナ事務所日本人スタッフの方より、日本語による現地の状況の説明、今回のニュースの解説

第二部：Q&A セッション

小石川生より、英語で現地の状況を質問

第三部：小石川生へメッセージ

JICA パレスチナ事務所よりコメントをもらう

第一部では、JICA パレスチナ事務所の日本人職員の坂元様に現地の様子や今回の衝突について説明してもらった。衝突に向かうまでのリアルなプロセスや現地でのイスラム組織のハマスの様子、停戦後の状況について説明してもらった。生徒からは、今回の衝突に関する国際政治に関する質問やコロナ禍における現地の状況への質問があった。報道だけでは分からない詳細を聞くことができた。

第二部では、本校の生徒より、ガザ出張所パレスチナ人職員サヘル氏の双子の子どもであるジャベルさんとエリアンさんに英語で質問をさせていただいた。本校生徒より、ロケット

弾が飛んできたときのことや2014年のガザ戦争と比較して今回の空爆はどうだったかなどの質問がでた。エリアンさんが丁寧に答えてくれ、家族で11日間空爆の恐怖の中で過ごしたことを理解することができた。2014 年の時はまだ子どもだったが今は状況が理解できるので、より怖かったという話もでた。最初は、今回の爆撃の恐怖に関する話題だったが、やがて好きなことや将来の夢の話になった。本校生徒が、自分達の学校生活の話をすると、ジャベルさんが自ら作成した動画を見せてくれた。「インスタグラムやってたら教えて？」というと、ジャベルさんがインスタグラムを見せくれ、ジャベルさんが撮った映像や写真を見て大いに盛り上がった。リアルタイムでアカウントを交換し、オンラインビデオ会議の画面上で、アカウントが繋がったのがわかり、クラスに大きな歓声が起こった。SNS を使って、何百キロと離れている異国の地と、まるで今この瞬間にそばにいて、隣同士に座ってお互いスマホをいじっているかのような感覚で、あっという間に同世代同士の会話で繋がる体験をすることができた。ジャベルさんの夢は映像制作に携わることだという。日本に留学してみたいという話が出た。本校の生徒が深く共感する場面があった。

第三部では、パレスチナ事務所ガザ出張所パレスチナ人職員サヘル氏からメッセージと、2人の自分の子どもへの想いを聞いた。将来の夢を持つ子供たちに対して、ガザから一歩も外に出られない、空港も見たことがない、というコメントとともに、子どもの将来を案じる話がでた。親が子を想う気持ちは世界共通で深く尊いものだと理解することができた。最後に、パレスチナ事務所の坂元様から、今回の交流のまとめを行ってもらった。

生徒の感想

実施後、生徒から次のような感想が得られた。

【同世代の2人へ】

・エリアンさんとジャベルさんが私たちと同い年だということや、写真やアニメ、勉強など普段日本の友達と話すような話題で盛り上がったことで、ガザの問題が身近になったように感じた。

・エリアンさんとジャベルさんも、僕達と同世代の人達であるということも強く実感できました。自分とは離れた存在であると考えてしまいがちなのですが、2人と趣味や好きなアニメについて話したり、インスタグラムの写真について話したりしたことで、同世代の人たちを身近に感じることができ、またそこに住む人たちのことも、自分たちと同じ人たちだと感じられるようになりました。

・ジャベルはインスタグラムに写真を活発にアップロードしていて、何だか同じ時代に生きる子どもとしての仲間意識のようなものも芽生えた。

・現地の風景をニュースで見たことはあるけれど、同世代の様子を知る機会はなかったので、今回エリアンさんとジャベルさんと話すことができて、短い時間の中でも心の距離がぐっと縮まったのが分かりました。

・今日一緒に共有した45分間を2人も覚えていてくれたらいいな、2人が安心して、日本

でも世界中どこでも自由に行き来できる日が来たらいいなと願わずにはいられませんでした。

・2人も自分と同じように夢があって、好きなことがあって、ということに少なからず親近感を覚えましたし、いつか実際に会えるような日がきてほしいと、表面だけでうたわれる平和よりも、もっと深いものが自分の中にできあがったように感じます。

・実際に現地に住む同世代と話してわかったのは、当たり前のことですが、彼らにも夢があるということです。同じ夢を持つ若者として、自分が恵まれた環境で過ごしているかを実感し、また、世界の若者たちが夢を掴むことができる環境が整ってほしいと願わずにはいられませんでした。

【未来に向けて】

・世界の現状を解決するためには、対話を通して国際社会で団結し、基本的人権を守り平和な社会を作るんだ、という強い姿勢で変えようとしなければならないと思います。

・世界全体で連帯するためには交流を深めることが大切です。私はこれから様々な価値観・背景を持つ人と互いに意見交換し、交流していくことで視野を広げ、国際社会の“輪”の1ピースになれるよう行動していきたいと思います。

・人間が争いを放棄することなど到底無理な話なのではないか、どんな対策を講じても結局は火種を消すことなど一切不可能なのではないかと、僕はつい悲観的になってしまいます。確かにそうかもしれない。けれど、そこでみんなが諦めてしまったら、そこに住んでいる人はただ見捨てられたことになる。自分と多少の差異はあれど、確かに生きている人のために諦めてはならない。

・周りの人から色々な機会や幸福を享受している以上、僕もどんな形か分かりませんが社会に貢献できるようにならなければいけないと、今回のオンライン授業を受けて思いました。

・停戦後、ニュースなどでガザについて聞くことはピタッとなくなり、どこかガザのことや紛争のことを忘れてしまっていましたが、そこにいる人にとって停戦は終わりではなくて通過点でしかないこと、また報道が止まることは全ての問題が解決されたことを意味するわけではないことに改めて気づきました。

・僕は、世界を変えていくということには、若者の新しい考えや力が不可欠だと思っていますが、現状を変えたいという強い思いもわきました。

・今回の授業のおかげで自身の社会に対する態度を省みるきっかけができました。LGBT、多くの内戦、そのような様々な問題に対して、大きな主語をもって見つめるのではなく、しっかりとターゲットを定めて深く考えていきたいと思いました。

・今、世界の多くの人がコロナや明日のご飯のこと、仕事のこと、明日の命のことなど様々な心配事に悩まされ、他人のことに興味を持ったり、気にかけたりする余裕がなくなってきているかもしれません。私は小さい人間で、受験や将来のことなど他の人から見たら本当にささいなことに悩まされ、周りが見えなくなってしまうことがよくあります。しかし、私が生きている今も、何らかの理由で苦しんでいる人、命を落としてしまった人がいます。

それは、私の隣の席の友達かもしれないし、ガザにいる人かもしれないし、アフリカにいる人かもしれません。
遠いからという理由で私には関係ないと考える人になりたくありません。これから自分でいろんなことに目を向け、いろんな人の話を聞き、人とのつながりや人の温度感を大切に生きたいと思います。

生徒感想を受けて―17 歳の共有点

私は、国際交流を企画する時に留意している点がある。まず、国際協力団体、関係者にその国の歴史や情勢を解説していただくことだ。生徒が、マクロな視点（鳥の視点）から、物事を俯瞰して捉え、公平で中立な立場から学習する機会を持つためである。そのあと、その国の人と交流したり、インタビューを聞いたりする機会を設けることで、机上で学んでいたことを一気に身近なものへと引き寄せることだ。ミクロな視点（アリの視点）から、一人の人と対話を持つことで、友情や人間愛といったものが芽生えると思う。歴史や国際情勢を勉強するということ、そこで暮らす人の命や温もりを感じるということ、この前者から後者への転換を私は「マクロからミクロへの視点の転換」と呼んでいる。

今回、17 歳という同い年の高校生同士の対話の中で、遠く離れた日本とガザで、お互いのスマホの画面を通して、同じ空間を共有する交流となった。パレスチナと聞くと、どうしても“パレスチナ難民”とか“ハマス組織”とか、枠組みに当てはめて理解しがちである。しかし、今回の交流によって、複雑な情勢でも、同じ人として、相手にも家族がいて、学校に通って、勉強に苦戦し、そして将来の夢があることを、生徒は心の深い部分で理解できたと思う。私が目指した「マクロからミクロへの視点の転換」は、今回の交流では、SNS のアカウントを交換するということをきっかけに、大きく転換し、国籍、ルーツ、宗教、ジェンダー枠組みを超えて、それぞれが人として輝く部分から互いの共有点を見つけられた機会となった。生徒の感想から見てとれるように、「マクロからミクロへの視点の転換」に留意することで、交流相手への人間愛と未来への強い意志が現れることが分かる。

まとめ

英語科の教員の私にとって最も幸福な時間は、国際交流実施後に生徒と意見を交換したり、生徒の感想を読んだりした時だ。高校生の感想には毎回希望をもらうことができる。生徒の感想から分かることは、異なる文化的背景がある同世代にも共有点があることだ。その他者理解から芽生える他者への想いはとても尊い。

若者が希望を持って幸せに生きる世界にするには、他者理解が必要だ。では何を理解するのか。それは、それぞれ個人の語るに値するストーリーだと思う。互いに芽生える連帯は、恐怖に打ち克つ、憎悪に打ち克つ、差別に打ち克つ、偏見に打ち克つ力がある。そのような力がそれぞれ個人が持つストーリーには秘められていると思うのだ。相手に心を働かせることができれば、それがやがて志や使命感になるのではないか。

国際理解教育の果たすべき役割とは、価値ある出会いを創出し、生徒の分かり合えたとい

う体験、あるいは他者への幸福に想いを馳せる体験に繋げることだと考える。私の夢は、他者理解を目指した国際理解教育を実践し、海外の方と対話が持てる温かい生徒を育てて、世界の分断や対立、偏見の緩和に貢献することだ。世界の分断、対立、差別、偏見の緩和の最も有効な手段は教育であるという考えのもと、生徒の将来を豊かにする国際交流を開発していきたい。

世界の憎しみ、怒り、悲しみを和らげるものは、一人ひとりの一言や温もりだ。私達の差し出した手が、誰かの一歩を助けるかもしれない。不安定な社会、不安定な人間関係の中であっても、自分の行動に対する主体的選択と温もりを持ち続ける人間を、生徒とともに目指していきたい。

おわりに

JICA パレスチナ事務所及びガザ出張所、JICA 東京の皆様には、今回の授業を実施するために、多大なご協力をいただいた。心より感謝申し上げたい。また、共に世界の課題について考えてくれた小石川の 11 期生の生徒達と同じ時間を共有できたことは、私の教員人生にとって、とても財産になった。深く感謝をするとともに、生徒達には、小石川での学びを活かして、国境を超え、相互理解ができる世界の実現を託したい。そして、世界の人々と温かい対話を持って、世界の幸せに寄与してほしい。

最後に、私の教育実践は、教師を目指し癌で闘病してこの世を去った同級生に捧げる。

参考資料

本授業実践の内容は、以下の媒体より取材を受け、掲載されている。

・『火論　等身大のやり取り』毎日新聞 2021 年 6 月 21 日朝刊及びオンライン版
https://mainichi.jp/articles/20210629/ddm/002/070/045000c

・JICA 東京 HP 『Dear friends in Gaza 〜心の平和に砦を〜』
https://www.jica.go.jp/tokyo/topics/2021/ku57pq00000mj94y.html

本授業実践以外の記録は、以下の媒体に掲載されている。

・末　佐和子『他者理解を目指した国際理解教育の実践―その先にあるものは、分かり合うこと、語り合うこと―』(明治大学教育会紀要第 13 号)
https://www.meiji.ac.jp/shikaku/kyoikukai/6t5h7p00003b2qgq-att/011_sue.pdf